



町民参加の町史づくり



1995.3.31(金)

第 7 号



竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
TEL・FAX兼用 (09808) 2-9985

目

次



第九回町史編集委員会トピックス	(1)
町史編集委員会トピックス	(2)
戦さ場に実相	(3)
島じまの語り部たち	(4)
戦時・戦後体験記録の募集要項	(5)
写真に見るわが町	(6)
浦内橋の完成	(7)
新聞で知る町の今昔	(8)
古文書紹介	(9)
波照間村番所の板文書	(10)
文化財探訪	(11)
ブズマリ	(12)
聖地めぐり	(13)
友利御嶽	(14)
歴史の証言	(15)
炭鉱、学校教育、炭焼き生活	(16)
収蔵図書紹介	(17)
業務日誌	(18)
編集後記	(19)

表紙の写真

大原中学校は1949年（昭和24年）、新学制の発足に伴い西表島東部に設置された。それは大原実業高等学校の廃止してのスタートだった。写真は学校の発足当初に校内うるまパークで撮られたものである。資料によると生徒数は不明だが、1952年（昭和27年）には15人であることから、ほぼ同様だと思われる。（写真提供・細原一雄さん）

☆題字 大城正明

第九回町史編集委員会

一十六人に委嘱状を交付―

竹富町史編集委員会の委嘱状交付式及び第九回町史編集委員会が、一月二十八日午前十時から町史編集室で開かれました。委嘱状交付は委員の任期満了に伴うもので、十六人の委員に友利哲雄町長から委嘱状が手渡されました。

委嘱状交付の後、友利町長が「町史編集委員として、これまで編集計画に基づき素晴らしい活動をされ、立派なものを作り発刊してきました。写真集『ぱいぬしまじま』が沖縄タイムス出版文化賞をいただくほか『新聞集成Ⅰ』を刊行することが出来ました。引き続き町史編集をよろしくお願い致します」とあいさつを行ない協力を求めました。

第九回編集委員会では①第一回資料編「新聞集成Ⅲ」の編集②第二回資料編「戦争体験記録」編集の進捗状況③第三回資料編「近代・前近代」編集について

てを議題に慎重な審議が行なわれました。

「新聞集成Ⅲ」は「新聞集成Ⅱ」に引き続き発刊されるもので、新聞は昭和九年から同二十年までに発行された「琉球新報」「沖縄日報」「八重山新報」「八重山民報」「先島朝日新聞」「海南時報」の六紙を取り扱います。記事は一五四件を見込んでいます。「戦争体験記録」は現在、戦災実態調査票の回収に全力投球しております。発刊は当初、平成八年度としましたが、戦後五〇年事業のため平成七年度とし「新聞集成Ⅱ」は平成八年度に発刊することに変更しました。

「前近代・近代」は今後、資料の収集に力を注ぎ、平成九年度発刊を目指すことが確認されました。編集委員は全員、再任で任期は平成九年一月三十一日までの二年間となります。委員長は當山哲男氏、副委員長には西里喜行氏を再選しました。

竹富町史編集委員

○印は副委員長

○當山 哲男 元竹富町企画課長
○西里 喜行 琉球大学教育学部

○西島 信昇

琉球大学名譽教授

○大城 學 沖縄県教育庁文化課
○加治工真市 沖縄県立芸術大学

○黒島 精耕 明石小学校

○三木 健 琉球新報編集局
○玉城 功一 八重山商工高校

○石垣 久雄 泊高校（通信制課程）

○新本 光孝 琉球大学農学部

○山盛 直 琉球大学農学部

○本成 善康 元教育事務所長

○阿佐伊孫良 銀座郵便局

○上江洲儀正 南山舎代表

○登野原 武 竹富町教育委員会

○安里 碩八 竹富町役場

《町史編集委員会トピック》

—竹富島で史跡巡検—



西塘の生い立ち等の説明を受ける編集委員

「島じまの史跡を訪ねて」と題し町史編集委員会は今回、初めて史跡巡検を実施しました。巡検地は歴史と文化の香りが高く国の町並み保存地区に選定されている竹富島。第九回町史編集委員会に引

き続き、午後から出席者全員が参加して行ないました。この日は曇天で小雨まりの生憎の天気だったが、編集委員の関心は高く、悪天候を突いて実施しました。

編集委員は午後一時三十分出発の定期船に乗り込み、竹富東港に到着の後それぞれ乗用車に分乗して巡検先へと向かいました。訪れた場所は世持嶽の境内の一角にある小城盛、忠魂碑、弥勒奉安殿、それに河上家、国吉家の機銃跡、藏元跡、島の南海岸にある銃眼跡、喜宝院蒐集館、西塘御嶽など九カ所。講師は町文化財保護審議委員の前本隆一氏が務め、分かりやすく説明しました。

西塘御嶽は八重山で初めて頭職に就任した西塘の墓だが、そこでは西塘の生誕、活躍、死亡にまつわる興味深い話しがあり注目を集めました。銃眼跡は去る太平洋戦争の時、地域住民を動員して造られたといい、あまり知られていません。編集委員の中から「説明板を設置すべきだ」という声も出ました。当初、島の集落の成り立ちを知る新里村遺跡を訪れる計画だったが、悪天候のため中止しました。

沖縄県 地域史協議会研修会

沖縄県地域史協議会（泉川良彦代表）の一九九四年第二回宿泊研修会が、昨年十月五日から七日までの三日間、伊是名村で開かれた。参加者は約五十人。伊是名村の歴史、文化に触れるとともに古文書の取り扱いについて知識を深めた。

研修会初日は伊是名村文化財保護審議委員の泉文聰氏が「伊是名の歴史と文化」と題して講演。尚円の生誕地である島の歴史や琉球王統等を説いた。二日目は午前中、島内を一周して史跡巡検を行なった。訪れた場所は伊是名玉陵、銘苅家など十カ所。奥深い島の歴史を学んだ。

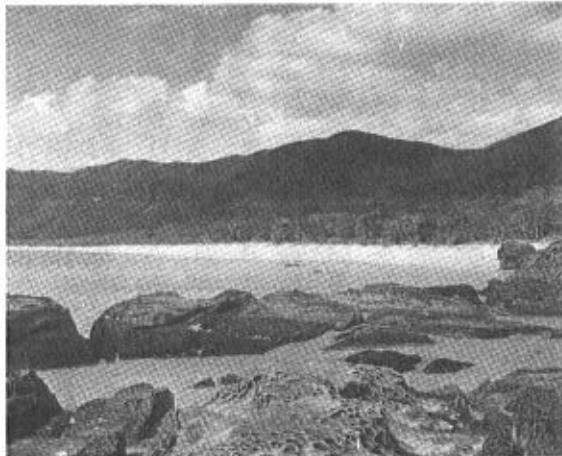
午後からは研修に入り「古文書に関する知識と取り扱いについて」と題して上江洲敏夫氏（具志川市史編さん室長）、「銘苅家文書の清明供物関係資料について」と題し小野まさ子氏（前原高校教諭）が各々、述べた。また「近代辞令書調査報告」についても行なわれた。三日目は島を離れ全日程を終了した。

《戦さ場の実相》

—島じまの語り部たち—

水汲みと蠅取りが日課

宮良フジ（波照間出身）



波照間島の住民が疎開した南風見海岸

西表島の南風見への疎開は、昭和二十一年四月にありました。疎開は漁船で行な

われ住民は各部落、各班単位で西表島に渡りました。私は三回目の渡りで西表島に行きました。当時、私の父・宮良定勝は豊福丸の船長をしていて、北部落と南部の人々を疎開させました。船員は鳩間さん、屋良部さん、大泊さんで父と一緒に住民の輸送に当たりました。疎開は昼間はアメリカ軍の空襲があるので、夜間カツオ漁船を出して行なわれました。

西表島への疎開があつた時、私は数え十二歳で小学校五年生の終わりの頃だった。まだ六年生になっていなかつたら多分、その頃だったように記憶しています。入学式は波照間島ではなく、疎開地の南風見で行なわれました。その時、弟の成知が一年生に入学しました。時期は疎開して一ヵ月後の五月で、場所は通称ヌギリヌバと呼ばれた平たい岩場だった。校長は識名信升先生で優しい人でした。入学式は一応、終わって授業に入りました。しかし授業は学校で普通やるような内容ではありません。何しろ戦争中ですから…。島の先輩が色々とお話をしてくれました。私の当時の担任は波照間島の

米盛トミ先生で、西表島に疎開されたのか、どうか分かりません。波照間島の住民が西表島に疎開するということで、学校の先生方はそれぞれ石垣島に帰ったと思います。そうなると通常の授業ができる訳がありません。

疎開地での授業は授業とはいっても教室、机、ノートがありません。それこそ青空教室として岩の上での学習となりました。黒板ノートの代りは砂浜で砂の上に文字を書いて勉強しました。子供たちは疎開先ではそれ、仕事の役割がありました。一日の生活の始まりは、まず水汲みからです。避難地から遠くにある川に行き、二人一組になって水を避難小屋まで運びます。それに蠅取りです。それは西表島に疎開を命令した山下軍曹の指示であり、竹筒に殺した蠅を一杯にするのです。竹筒内の殺した蠅の量が少ないと、山下に竹のムチで力いっぱい叩かれるのです。叩かれる回数は、学年によって決っているようでした。実際に叩かれる人もいました。

女の子は疎開先では、このほかに子守

りも日課のひとつでした。私の家には幼い子がいて一日中、子守りをしました。

授業もありましたが、学習というようなものではありません。それよりも一日の水汲みとか、子守りが大変でした。そうするうちに私はマラリアに罹り、体力は日一日と衰えていきました。疎開生活で何んと言つても苦しいのは、食糧の確保でした。各班では畑を作り、イモ等を栽培し食料に充てました。子供たちは野山に出掛け、イチゴ採りをしたこともありました。またイワカンガナを探りに行つたこともあります。

波照間島では南風見に避難する以前に空襲もありました。戦闘機が機銃掃射をすると岩かげに隠れ、難を逃れることもありました。日本が負け終戦になると、西表島での疎開生活を終え、波照間島に帰って来ました。しかしまラリアに罹っているため自力で歩くことができません。島に帰る時、モッコに入れられ親に担がれて家に戻って来ました。

私の家族は終戦前後に九人中、七人が亡くなりました。死因は全てマラリアで

す。生き残ったのは私と姉の二人だけです。両親も妹、弟も死にました。私たち二人は当時まだ大人になつていません。

戦後の食糧難の中で生活していくには大変です。そのため私は十九歳になるまで、本家の宮良真勢の家で暮らしていました。戦争は恐ろしいものです。マラリアは島の人々を苦しめました。その苦しみは西表島に疎開しなければありませんでした。戦争は本当にイヤです。

(現住所 竹富町字波照間五二三三二番地)

(当時 十一歳)

会社勤務、避難そして空襲

山田 鐵之助（網取出身）

私は昭和十六年四月、合名会社、池畠運送店西表派出所（昭和十七年六月、先島運輸株式会社と改称）勤務となり、同社は相羽氏を主任に私、宮良氏、崎山氏が事務をとつていた。唯一の船客や荷物、郵便物を運ぶ船（おもと丸）は西表氏、

大城氏、崎山寛一氏の三氏が乗組員として派出所の運営に当たっていた。

事務所は十八坪の瓦ぶきで、一間切りに西表氏が住み、一間切りで事務をとつていた。倉庫は三十坪程の瓦ぶきで隣に二棟（十二坪）のトタンぶきがあつて、一棟に相羽氏と崎山氏、もう一棟には私と、宮良氏が住んでいた。東洋産業、星岡鉱業、丸三鉱業は各自の販売所を持ち、日用雑貨を売っていた。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争が勃発し、昭和十七年七月には宮良氏と私は前後して応召されることになり、数日かかる佐世保まで行つた。そこで検査があつたが私は即日、帰郷の身となり沖縄に帰る羽目になった。その中で四十日間の鹿児島での滞在を余儀なくされ、幸いにも福永政美氏の計らいで沖縄に渡り、宮古まで行くことができた。

宮古では先島運輸株式会社八重山支店長の切通氏にお会いできて、切通氏の取りなしで西表派出所への復職が叶えられることになった。こうなると一日も早く西表島に帰ることが第一と考え、いろいろ

ろ船便を探していた。そうすると幸いにも義母が白浜行きの船便を聞き込んで来て、たまたまその船が先島運輸株式会社宮古支店の解で運よく帰ることが出来た。

白浜に行くと相羽主任は、鹿児島へ帰られたようで西表氏と大城氏は残って仕事をしていた。そこで彼等と一緒に勤務することができた。こちらでは仲良川の奥に避難することになり、小屋造りを会社単位で行なうことになった。小屋は二日間程で造り上げ、いよいよ避難が出来るようになった。

防空壕は事務所構内と宿舎構内にそれ一つ造り、大事なものは壕に運んで来た。小荷物や炊事道具は、潮時を見計らって運んで置いた。その後、女子や子供と一緒に連れて行き、しばらくその小屋での生活が始まった。ところが白浜が空襲に遭い、三分の一の住居が灰になつた。所帶道具は焼け出され、やむを得ず我家の網取に行くことになった。だが網取も空襲で村半分が焼かれてしまった。

(現住所 石垣市石垣九九一三番地)

(当時 三〇歳=会社員)

戦争中の体験と記憶

東兼久 正次（黒島出身）

西表島への疎開は年月日は確かではないが、軍の命令で船のない父と祖母が部落の爬龍船を借り受けて最初、八名で行くことになりました。夕方出発し海は静かでしたが、初めてであり怖かったのです。何時かは知りませんが暗闇に中、高い山影が見えてきました。そこで塩魚の焼き臭いがしたので父に「ここはどこか」と聞いたら「波照間島からの避難場所でしょう」と言いました。そこは仲間川の入り口でした。ここから奥へ行きヒルギの中に船をつけ、夜明けを待つことにしました。何処からとなく聞こえてくるのがカッチャン、僕は驚いて何かと尋ねました。これは貝が蓋を閉じる時の音だと分かりました。夜明けになると早速、島に着きました。するとそこには台湾の人たちが避難していました。

翌日また避難場所を探しに海岸から奥地へ一五〇㍍地点の川の側で避難するように決めそして家や、防空壕を造り生活をしました。幸い家族は皆、健康でした。避難場所は大変でそこに何月いたのかは知りません。もっと大変なのは避難から帰つてからの生活だったと思います。

(現住所 石垣市登野城一〇一一番地)
(当時 十一歳)

き、船を出し今の大富部落の岩の上から木が茂っている影の所に置き、船番に姉と兄を残して六名で避難場所を探しにハチヤ崎へと歩きました。途中、ガアバナリ島に寄ると部落の人たちが避難していてマラリアに罹って苦しんでいるのを見たこともダメだということでハチヤ崎に歩きました。ハチヤ崎では大きな岩の側で一晩、過ごすことを決め父は船を取りに後戻り、その時アメリカ軍の戦闘機が小浜島を攻撃しました。私たちの真上からでした。僕は驚いて岩影でそのまま寝て起きると夜中で船も着いていました。父は召集兵から満期してきた時でしたので大変、助かりました。

戦時・戦後体験記録の募集要項

一、募集対象者

イ、戦前の竹富村民及び現在の竹富町民。

ロ、竹富町民で戦争を体験されたごとのある方。

ハ、沖縄県内及び本土在住の竹富町出身者。

二、戦後復興を（生活等）竹富町内で体験された方。

ホ、当時、竹富町に駐屯していた軍隊等。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和十九年当時の年齢生年月日、職業もお書きの上、左記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

（一九七二年（昭和四七年）五月十五日本土復帰まで。

三、原稿の枚数

四百字詰め原稿用紙の五枚から二〇枚程度。

四、原稿の締切
平成七年六月二〇日までとする。

二十九〇七

沖縄県石垣市字大川一〇番地
竹富町役場（町史編集室）

二〇九八〇八一一一九九八五

五、収録決定は、竹富町史編集委員会が行います。

六、収録の場合添削することがあります。

七、収録された方には冊子（体験記録）編集取材協力記念タオルを進呈します。

八、提出した原稿は、返却いたしません。

九、原稿には、住所、氏名、現在の年齢、昭和十九年当時の年齢生年月日、職業もお書きの上、左記竹富町史編集室あてにお送り下さい。

十、聞き書きをしてもらいたい方も左記へご連絡下さい。

連絡先

今年は戦後五十年になります。戦争の実相を明らかにする中で、戦争体験者の高齢化が進んでおり、早急に戦争体験者の証言記録を戦争資料として残していく必要があります。これは恒久平和を願う立場から重要です。戦争体験記録は戦争を知る証として編集することは大切です。

戦争体験記録の編集

竹富町史編集室では現在、第十巻資料編「戦争体験記録」の編集に向けて戦争体験に関する手記の募集及び証言の聞き取り調査に取り組んでいます。手記はこれまで五十三点が寄せられ、聞き取りは五十六人から行ないました。収集した体験内容を読みますと戦地に出向き戦闘に参加した人、石垣島で飛行場造りに動員された人、八重山高等女学校の生徒で海軍及び陸軍、野戦病院に従軍看護婦として駆り出された人、国民学校生徒だった人など様々です。そこには戦地行軍、空襲、疎開、軍作業等があり住民の辛くて苦しい体験があります。

竹富町史編集室では現在、第十巻資料編「戦争体験記録」の編集に向けて戦争体験に関する手記の募集及び証言の聞き取り調査に取り組んでいます。手記はこれまで五十三点が寄せられ、聞き取りは五十六人から行ないました。収集した体験内容を読みますと戦地に出向き戦闘に参加した人、石垣島で飛行場造りに動員された人、八重山高等女学校の生徒で海軍及び陸軍、野戦病院に従軍看護婦として駆り出された人、国民学校生徒だった人など様々です。そこには戦地行軍、空襲、疎開、軍作業等があり住民の辛くて苦しい体験があります。



井上さんの家族を先頭に渡り初め

《写真に見るわが町》

浦内橋の完成

八重山諸島の中で最も広大な西表島は、自然が豊かで雄大さが魅力である。全島の約七〇%が標高二百メートルを越える山々からなり山岳地帯は亞熱帯常緑樹で覆われている。河川は東部、北部、西部にありゅつたりと流れる。浦内川は県内で最長を誇り延長一八・八km。上原地区と西表地区とを分け西部に注ぐ。流れは大河の様相を呈している。

架橋のない頃、渡るには難波を極め渡し舟が住民にとつて唯一の足だった。「浦内川に橋を!」との思いは地域住民の念願であり、西表島開発の観点からも必要だった。これに基づき浦内川架橋は町議会でも取り上げられ、関係機関へ要請するため陳情案件を採択、波状的に行動を起こした。これに対しアメリカ高等弁務官は「架橋となると数十万ドルの予算が要る。実現はほとんど不可能だ。そこで渡し舟ではどうか」と語ったエピソードもある。

浦内橋は糸余曲折を経ながらも一九七〇年(昭和四十五年)に竣工した。二年間に及ぶ大工事だった。架橋完成を祝う記念式典は同年三月、地区を挙げて盛大に催された。写真は井上家三代を先頭にした渡り初めである。橋は「浦内川架橋竣工記念誌」によると総工費七十五万一千四百四十二ドル。規模は総延長二七二・一m、幅員七ドル。橋型は合成桁橋である。

(通事孝作)

『新聞で知る町の今昔』

村役場移転

竹富町役場は現在、石垣市にあるが古くは竹富島に設置され、行政が行なわれていた。それは一九一四年（大正三年）

御挨拶

議啓 時下秋涼の節益、御清坐の段春候候

陳者竹富村民多半宿泊故村役場移転は去る十一月十九日石垣町字登野城九番地に移転新址敷居設之備に各位の御出席御後援の賜と有難く御仕候向 藩とも竹富城を慶興の爲佔島の御指図仰候經を賜り度伏し。謹願致。先は右御挨拶迄如斯御座候。敬具
（一月二十日）

各 位 竹富村長 山田 武三

村役場移転を告知する山田
村長の挨拶（海南時報）

昭和十三年九月一日 移転問題がクローズアップし同年三月二

日、村議会は満場一致で石垣町へ役場を

移転することを決議した。

『海南時報』の一九三八年（同十三年）三月五日付記事は「役場所在地が字竹富であるので他の六離島の村民は先づ石垣町に渡り、それから字竹富に渡って役場への用事を済ますと言ふ不便があったが今

回懸案の役場問題が村

会を通過したので村民

に喜びは一方ならぬも

のがある」と書き綴る。

役場移転については当

時、県及び内務省では

すでに了解しており認

可することは確実視さ

れていた。それは後日、

認可指令が出されたこ

とで明白になった。

認可指令は次のように発せられている。

沖縄県指令四三六号

八重山郡竹富村

四月一日に八重山村が石垣村、大浜村、竹富村、与那国村に分村し村役場が世持御嶽の境内（竹富四〇番地）に設けられて以来、ずっと続いていた。それが一九三八年（昭和十三年）に入ると村役場の

昭和十三年三月七日庶第一九九号裏諸の
村役場移転の件許可す。

昭和十三年九月一日

沖縄県知事 淵上房太郎

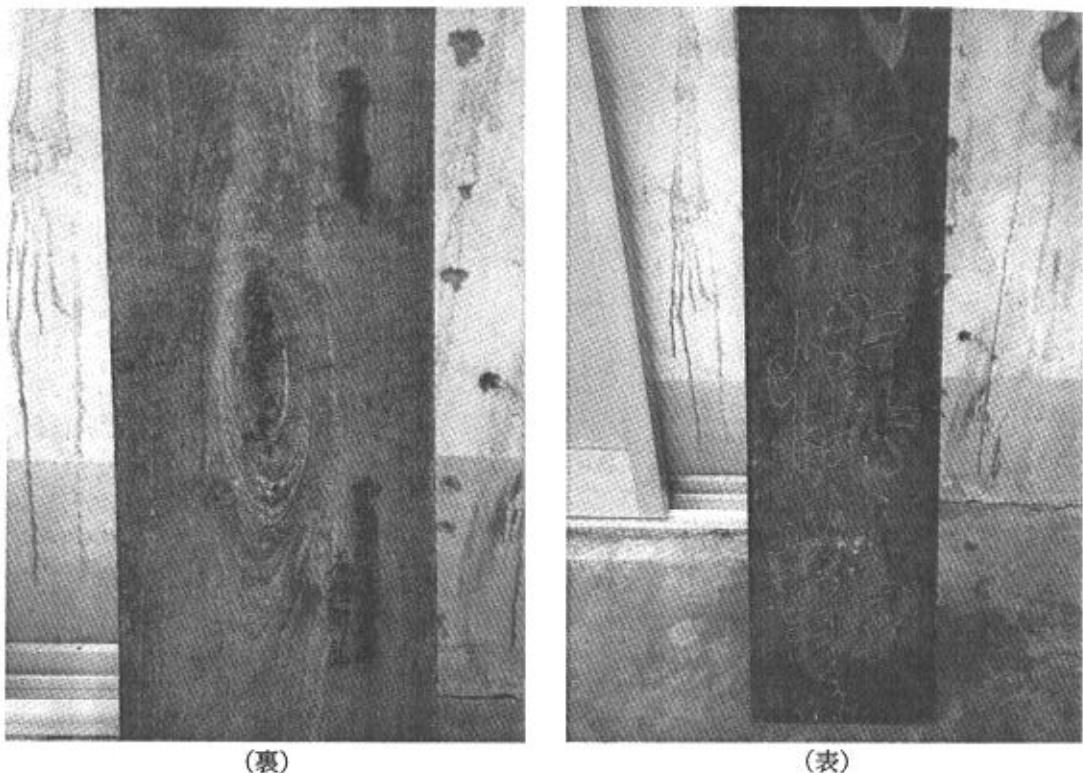
これについて沖縄県は移転計画書に基づき遺憾のないように実施し、移転予定期年月日、完了年月日の報告を求めている。

村役場移転については村議会の移転決議、県の認可指令等があり諸問題は段階的に解消、後は村民の声を基にした首長の決断が残されていた。当時の村長は柴田米三氏。同氏は一九三八年（同十三年）三月二十九日の村議会で当選、三月三十日に第八代村長として就任した。就任に際し赤字財政の克服とともに、村役場移転を提示した。「村会で決議された竹富村役場を石垣町へ移転する案件が当面の大仕事である」との姿勢を示した。柴田村長は役場移転を決め同年四月十三日で辞めた。二週間の短命村長だった。その後、村政は紛糾し同年七月十四日に山田武三村長が誕生した。村役場移転は山田村長の下で行なわれ、十一月二十五日に移転式が挙行された。それにより村役場は石垣町字登野城に設置され、村政業務が進められた。

（通事孝作）

《古文書紹介》

波照間村番所の板文書



(裏)

(表)

【表記】

(表)

(裏)

清慎勤
タテ一一一・五
センダン

錦芳氏
波照間目差

横二〇・四
セイツ

石垣用箋

光緒十四年戊子

【解説】

八重山の古い時代の各村には、蔵元の管轄下に村番所が置かれ行政に当たっていた。そこには与人一人、目差一人、耕作筆者一人等が配置されていた。勤務者は職務に精励しなければならず板文書の「清慎勤」は文字通り、清らかに慎ましく勤めなさい、という意味である。寄進したのは目差職にあった石垣用箋であったのだろう。用箋は錦芳氏の十二世と言われる。中国年号の光緒十四年は明治二十一年、一八八八年である。当時は廃藩置県後だったが、中国年号の併用も許されていたのだろうか。縦書きのため篇額ではなく、聯で一枚対だった可能性が高い。

(通事孝作)

「ブズマリ」

琉球王府時代の正史『球陽』に烽火の制度について記載された条項がある。それは一六四四年（尚質四年）の項に貢船

でいる。
烽火の制度が施行された歴史的背景には、当時、琉球国を取り巻く国際政治の緊迫した状況があった。周辺海域には南蛮船が行き交い、王府はこれを監視する必要に迫られていた。一六四〇年には南蛮船が西表島の祖納村の近辺に来着し、幼女一人を掠める事件が起こった。この事件の関連については『八重山島年來記』にその記述がある。

烽火の制度の創設は、琉球の海防監視体制の強化及び明清動乱の琉球への波及に対処しよう、としたとの見方もある。いずれにせよ琉球列島の周辺海域を船舶を確実に把握し、海防体制を敷こうという王府の考え方があったことは否定できない。

八重山の島じまは、王府の烽火の制度施行に基づき、遠見台を設けた。山岳のある島は山を遠見台として利用した。低平の波照間島、上地島、下地島、黒島、竹富島では琉球石灰岩を積み上げて遠見台とした。一般的に火番盛と呼ばれているものである。



宮里にあるブズマリ

八重山の遠見台及び烽火台については『富川親方八重山島諸村公事帳』（一七八五年）に記述がある。その中に烽火の島間の受渡し順序や立火の種類が載っている。それは琉球船及び唐船は立火二つ、大和船は三つ、外国船は四つと記されており『球陽』とは内容が異なる。

黒島の遠見台にはブズマリがある。場所は、王府時代の宮里村に設置された村番所の南西方向で距離は僅かである。遠見台と村番所が隣接しているということは、村番所に詰めた役人が遠見番人の役割を果たしたのであろうか。そこは海が近い。ブズマリの名称だが「高く盛り上がっている所」とか「渦巻き状の石積み」に由来を持つと言われる。中にはヘソを表現している、と唱える人もいる。

ブズマリの大きさは基底部分が直径十九メートル前後、高さは約九メートル、上面の直径は三・四メートルと四・七メートルで、その規模は遠見台の中では群を抜いている。『八重山諸村公事帳』に遠見台としての「たは之辻」がある。ブズマリとはどのような関係にあるのだろうか。

（通事孝作）

《聖地めぐり》

友利御嶽



島で最も由緒深い友利御嶽

西表島の北方に浮かぶ鳩間島には御嶽が五つある。友利、ヒナイ、前泊、新川、西堂の五嶽がそれだが、中でも友利御嶽は最も古い由緒ある御嶽と言われている。島では「トウモリウガン」と呼ばれ「ム

トウガン」の別称もある。歌謡では常に鳩間島の対語として謡われる。このことからも最高の神格を持つ御嶽であることが分かる。

行政と村落の人口の移り変わり等をみると『宮古八重山両島絵図帳』（一六四八年）には古見間切・鳩間村とあり九八

生産石高。『参遭状』によると行政上、一体として扱われていた鬱川村が衰微し

たため与人目差が廃され古見村役人の曖となった。人口については『八重山島年來記』を見ると寄百姓があり一七〇三年（康熙四二年）に黒島保里村から百五十人の移住があった。そこで同年、独立村を陳情して認められ役人が常駐した。同

記に「鳩間村之儀古見村役人曖ニ而候處黒島保里武ヶ村ヨリ百五十人寄百姓ニ而地頭持被成候也」と明記されている。

村落及び御嶽の創設については「ムトウジラバ」に謡われている。歌詞を一部紹介してみると、こうである。

ばがばとうまーら
ゆたていだす
（囁）イラヨバラタ
（囁）ああ、村建

ティルメンガル

ての美事さよ

くりとうむりばー
らゆたていだす

（囁）同
（囁）同

やまれぶーしば
むとうばし

ヤマレ翁を指導者
として

（囁）同
（囁）同

御嶽を創設したのは鳩間儀佐真主と言われば名、船屋儀佐真主と呼ばれ宮古島の人と言われる。年代は一五〇九年頃のようだ。こうなると「ムトウジラバ」謡われているヤマレ翁との関係はどうなるのだろうか。

『琉球國由來記』『八重山島由來記』には神名、ヲトモリ、御イベ名、大ザナルガネと記す。島のトウニムトウは別の島のような性格ではなく、弥勒や旗頭のムトウ（元家）との関係が濃厚であるようだ。神司は神元である仲底家の女子が継承している。現在、仲伊部シズさんが務めている。結願祭、豊年祭には各御嶽の神司が参集する。

（通事孝作）

この友利御嶽を建
てたのは

《歴史の証言》

炭鉱、学校教育、 炭焼き生活

永田 欣也（五五歳）

竹富町上原八七〇一三（浦内）

【はじめに】



西表島西部の

近代、現代の歴史をみると炭鉱

は看過できない

キーワードであ

る。炭鉱はかつて同地区的経済を支えていた。炭鉱に連動した視点から教育を眺めると、私立の教育施設「みどり学園」の設立は極めて特異で重要性を有する。炭鉱に関する親などの子供たちは学園で勉学に励んでいた。永田さんもその一人で一時期、同園で学んだ経験を持つ。証言の中から当時の様子が浮かび上がってきた。語りは炭

鉱に命をかけた野田小一郎氏と関わった父親の炭鉱生活であり、みどり学園の授業や上原小学校の始まりのことであり、加えて父親とともに仕事した炭焼きのことであり、どれも歴史のひとコマを鮮明にさせる。上原地区の学校教育の変遷は、みどり学園から西表小学校浦内分校、西表小中学校上原分校、そして上原小中学校の独立という流れをみることができる。そこには地域住民の教育にかける情熱が底流としてあった。語りの中から教育及び産業の一端を窺い知ることができた。

▼炭鉱と父の思い出

私は浦内部落で昭和十五年九月十五日に生れました。元の部落です。元来、浦内に部落はありました。宇多良との関わりを言いますと、ちょうど当時、今住んでいる当たりに私の家があったのです。そこにはオオナヤ（大納屋）といつて炭鉱で働く坑夫たちが寝泊りしたり、食事をしたりする場所があったのです。隣の私の家に販売所みたいなものがあり

ました。それは宇多良にもありました。そこで浦内と宇多良とを行き来していました。それは戦前、戦時中のことです。

私は戦時は三、四歳ぐらいだった。

戦時中のことを言いますと、宇那利崎の向こうの海岸の後ろに洞窟（ガマ）がありました。戦時中は家はすっかり焼かれてしまって、大納屋の坑夫たちはそこで暮らしていました。大納屋は宇多良にもあったのです。宇多良とはどういう関係なのかと言いますと、私の親父は炭鉱の責任者をしていました。それが当時はどういうことなのか分からなかつたのです。親父は出身は熊本県です。永田末人と言います。おそらく炭鉱のために沖縄に来たと思います。戦争前の当時、沖縄という所はバイナップル等で一獲千金の夢をみている人の稼ぎ所で希望の持てる場所と聞いていました。親父は元は炭鉱関係の仕事をしており、炭鉱の中でも人事係の方だったと思うのですが、それに鉱山の技師つまり炭層を調べて回ることもやっていました。親父は白浜の向かいにある内離島で炭鉱の仕事に関わっていました。

した。それが白浜で病気になってしまい、その後、野田さんが親父を助けというか、連れて来ました。それから野田炭鉱に入りました。それ以来、ずっと野田さんと関わりました。

宇多良で生活をしたことあります。そこでの生活ははっきりとは覚えてはいません。何しろ幼児ですから。でもやはり浦内と宇多良とを往復していたような感じがします。浦内では私の家が販売所で、樽入りの醤油などを桶で計って入れて分け売りをしていました。これは宇多良にもありました。

宇多良で覚えているのは住んでいたといふよりも、単に泊まっていたという感じですか。戦時中は宇多良でも空襲がありました。空襲があると避難壕に逃げました。だからその頃、宇多良と浦内の間を行ったり、來たりしていたと思います。戦時中も坑夫はいました。当然に採炭もしていました。それがストップしたのは戦後になってからです。

空襲が激しくなると採炭もいいが、それこそ命が危ないので。戦争は当時、

▼宇多良炭鉱の断面

宇多良で一番、記憶に残っているのは山の神祭りです。大相撲の時、力士の名前を書いた幟を上げますね、それを見る

るというような時じゃなかつたかと思ひます。浦内は原野だったから、ここでは幟を立てて、祭り氣運を高めます。幟には何が書いてあるのか分かりません。宇多良炭鉱には長い段階があり、それを登つて行つたという記憶があります。今でも宇多良に行くと分かります。宇多良炭鉱は下の方に坑夫の住む棟があつて、さらに床屋、お寺がありました。そこを進んで行くと偉い人たちが住む棟とか事務所がありました。道をもつと進み登つて行くと野田さんの住宅がありました。

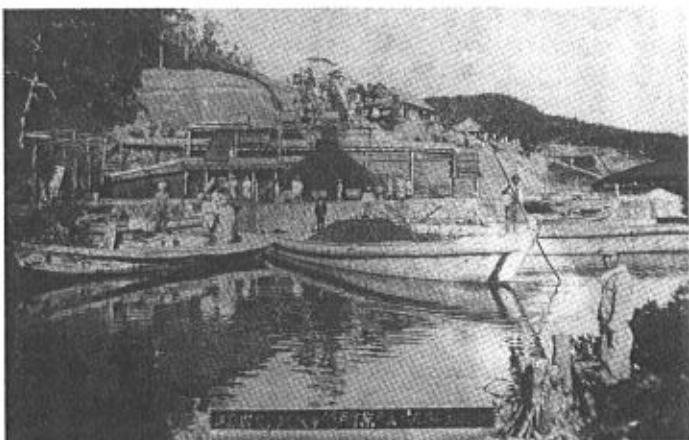
炭鉱の人々は一般的に野田さんのことを“上のおじさん”と呼んでいました。さら

に進むと山の神神社がありました。

山の神神社というのは私が三歳ぐらいの時のことだと思います。記憶をたどると宇多良炭鉱は一つの集落を形成していただろう、ということです。そこには神社の他、劇場もあり祭りの時にはそこで芝居もしたのです。それは宇多良から浦内に引っ越して来てからもずっと続きました。

宇多良で一番、記憶に残っているのは山の神祭りです。大相撲の時、力士の名前を書いた幟を上げますね、それを見る

のようだと思ひます。これを祀つて祭りの時には紅白の餅を作つて、そこで芝居をしたりしました。祭りになると他の部落からも山を越え見にきました。芝居では私の親父も役者だったのです。



丸三炭坑宇多良鉱業所の貯炭場

劇場には花道もあり、芝居では親父は切られ役もありました。親父が切られるとき泣いて舞台に上がりました。親父が切ら

れ倒れる場面を今でも覚えていました。

山の神神社の神主は、私が知っている範囲では野田さんの弟・小三郎さんだったと記憶しています。その前にもいたというが、私は覚えていません。山の神神社や神主という様式はヤマトウのものをそのまま持ってきたものだと思います。

宇多良炭鉱での思い出は次ぎに喧嘩だった。実に喧嘩が多かった。それは一癖のあるいかつい大人たちばかりだからです。その時、怖いなあというのは覚えていません。炭鉱で働いているのはごつつい人たちはあります。腕力で働いている人はありません。なにしろ理屈が通じる人ではありません。腕力はしょうがないでしよう。言っても分からぬものだから。そこで腕力のある人が上に立たなければなりません。そうしないと坑夫を押さえることはできない訳です。理屈で話しの分かる人ではありません。

しかし野田さんは真面目に仕事をやる人は可愛がった。腕力で押さえるのは酒を飲んで仕事を休む、そういう人を力で指導しました。酒を飲んで仕事を休む人

は、仕事ぎらいで、炭鉱から逃げたりするものです。逃げると連れ戻して叩くとか、そういうことをしました。そのようにしなければ統制がとれなかつたと思います。

▼“ゼロから出発”的学校

上原地区の教育について私の体験を中心にお話しします。浦内で生れて終戦直後は学校はありません。私は相当遅れて学校に入学しました。それも野田さんが創設した簡易の「みどり学園」です。それは小さな学校で、場所は浦内です。「みどり学園」は戦前に宇多良炭鉱で働いていた人の子弟のために設立されたといわれるが、それは分かりません。戦後の「みどり学園」は入学児童の年齢がまちまちで、七歳から九歳までの子供がいました。終戦直後は学校がないから仕方がなかったのです。当時は面白かった。兄さんも弟もみんな一緒に入学したものでした。だから同じクラスに兄弟が共に勉強するという光景が見られました。教室

では机を並べて学びました。

私は昭和二十二年か二十三年に「みどり学園」に入学しました。学校生活は教材用具は何もありません。先生は野田さんの方で働いている人の中から頭のきれ人をあてました。そういう人が教師となつて、そしてその時、教えることは何かと言いますと当然、教材もありません。そこでソテツの葉を用いてたし算やひき算を行ないました。「ここからいくつ引きなさい」という具合です。ソテツは教室のそばに積んで置きました。

私たちが入学した時の先生は三上とみさんといって、野田さんの身内の人でした。この人は師範学校を出ていて、これまでずっと教員をしておられた方です。

三上先生は当時ではオルガンを弾くことができました。授業では音楽の時間は黒板に歌詞を書いて、オルガンがないものですから手まねで弾く仕種をしました。そして一人ひとり歌わせました。歌う方法は先生が歌った後に続くという感じです。「歌詞がありオルガンがあれば、こういう風に歌うのだよ」と手本を示しま

した。

私が「みどり学園」で学んだのは何年生まででしたかねえ。三年生ぐらいまでだつたと思います。その頃は、宮古島から住吉に入植（昭和二十三年十月）がありました。そこで入植した人の子供たちが「みどり学園」に入つてきました。今でもその人々はおられます。宮古島からの子供もみんな入学したため、児童は二十人はいなかつたが十二、三人ぐらいはいたものだと思います。それは各学年、ほとんどいたものです。それは各学年、ほとんどいた

学校では運動会は、敷地が狭いため西表校で、そこの子供と一緒に行ないました。「みどり学園」にいたのは三年生までで、四年生からは上原校に行つたようになります。四年生からは上原校に行つたようです。四年生からは上原校に行つたよう

せん。最初の頃はそのような教材があり、結構、楽しかったのです。

私設の「みどり学園」は野田さんが経営しており、先生の給料も野田さんが支給していました。学園で学んでいるのは野田さんの所で働いている人の子供たちです。昼食は自分の家で食べるよりも野田さんの所で食べるのが楽しいのです。それが美味しいのです。野田さんの家は学校のすぐ隣です。野田さんの屋敷内に事務所みたいな所を野田さんが開放して「みどり学園」にしました。その前は宇多良にあったそうですが、宇多良のものは分かりません。でもあつた場所は分かれます。そこは貯水タンクのすぐ横です。学校の近くには薬局があつて、病院があつて、その一番下が劇場だったのです。その場所はよく覚えていました。宇多良に学校があつたということは記憶にはありません。

「みどり学園」では授業の始まる時間は決つていなかつたと思います。おそらく八時三十分ごろだったでしょう。朝食

をとり登校して一時間か二時間したら帰つたのではなかろうか。一年生の時の最初の授業は、全くそれらしきことはなかつたのです。学校で五十音順を学んだりしました。教材はなく遊び道具として先に話したソフトボールを貰つたぐらいです。最初の頃は教科書はありません。しかし二年後ですか、どこからか本や教材も出て来て帳面も貰いました。それはおそらく野田さんが買って与えたと思います。

そこでは鉛筆もあり、始めて勉強らしい勉強することになりました。

四年生頃になって上原小学校に通つた。学校には浦内は当然のこと、船浦からも通学する子供がいました。当時は住吉に入植があり、児童は多かったのです。授業は「みどり学園」とは違います。カヤぶきだが、校舎もありました。窓は上下させるものです。それに椅子は松の木を打ち込んで上に板を置いたものです。それはカンナはかけてありません。場所は元の上原小学校跡です。校舎はカヤぶきだから冬は暖いのです。運動用具はアメリカの払い下げです。グローブもあつた

が、それは大きく左右まちまちです。

学校から帰つて来ると、野田さんの所で働いている人の子供たちは、そこで手伝いをし、他の子供は農業の手伝いです。上原小学校が当時で一番多い時には一四〇人ぐらいはいたと思います。子供たちは中野、住吉、上原、船浦、浦内から通学して来ます。登校はもちろん徒步です。

浦内からは田んぼのあぜ道を歩けばそんなに遠くありません。それより船浦の方が遠かつたと思います。中には字多良から通つて来る子供もいました。通学時間はかなりなものでした。それは中学校まで続きました。浦内からは二十人近くいたのではないかでしょうか。

私設の「みどり学園」や上原小学校で学んだ當時を振り返つて見た時、これが学校なのがなあ、という感じがします。

「みどり学園」の場合、学舎は野田さんの会社の事務所の跡ですから、机は事務所のものがあつてそれを使いました。極めて家庭的な雰囲気で食事も出してもらつたり、おやつもいたときました。子供たちはほとんど年代は一緒でしょう、楽し

いものでした。教師は三上先生のあと、別の人気がいらっしゃいました。今考える「よくあんな所で勉強したなあ」と思っています。それにしても野田さんは偉い人です。島の産業ばかりではなく、教育にも情熱を注いでいましたから。字多良でも炭鉱で働いていた人の子弟を教育していました。

「みどり学園」では兄弟揃つての入学で、そして勉強でしょう。兄の方はかなり抵抗があつたらしいですよ。学校では弟の方が兄より頭がいい訳です。そうなると兄の方は良い感じがしないのか、途中から学校に行かなくなったりしたということです。それよりも第一番は生活です。兄の方が仕事も出来るため、家計を助けるため働くことになります。聞けば卒業したのは兄さんの方が少なかつたようです。当時は私たちから上の年齢の人もいましたから。何よりも生活です。子どもでも家庭の手伝いとかをしなければならず、まず食べる事が大事です。アメリカから衣類とか缶詰の提供がありまし

学用品は買いたくても帳面は余分にはありませんでした。最後は三年生ぐらいだったのか、一冊の帳面に何枚か算数、国語という具合に使い分け活用しました。



力ヤ葺き校舎の上原小学校

学用品は買いたくても帳面は余分にはありませんでした。最後は三年生ぐらいだったのか、一冊の帳面に何枚か算数、国語という具合に使い分け活用しました。

園の黒板は板に黒色を塗ったものです。チョークはありました。しかしノートはありません。先生は黒板を使って教えるが、子供にとっては勉強というものではありません。ただ歌を歌うだけです。あの時の先生は頭の古い方でしたから、頑固です。学校の授業で一番、印象に残っているのは歌を歌う時間のことです。学校には宮古の人の子供もいます。先生は一人ひとり子供を前に出して歌わせました。先生はその時、「みんなが知っている歌を歌いなさい」と言されました。歌う人は前に立って向かい、残りの子供たちは席に着きこれを聞きます。その中である子供が「赤い花なら、まんじゅしやげ」と歌い出しました。これを聞いた三上先生はものすごく怒って、その子供を叱りました。当時は流行歌がはやっており、彼にとってはこれが知っている歌であり、流行歌をうたうような環境だったと思います。先生が「知っている歌をうたえ」と言ったから歌ったまでのことがですが、先生にとっては子供らしくない、とでも思つたのでしょうか。とにかく三上先生は

学用品は買いたくても帳面は余分にはありませんでした。最後は三年生ぐらいだったのか、一冊の帳面に何枚か算数、国語という具合に使い分け活用しました。

西表島の日常生活や学校のことですが、今では方言を大事にしろ、と言います。しかし当時は方言を使つたら大変だったのです。学校には宮古の子供がいます。その子供たちは宮古の方言を使います。そうなると大変だったのです。私は方言は使えませんから、何もありませんでした。また当時は食料が不足していて、アメリカから生活用品を貰いました。学校に行くにはカバンがない訳です。そうすると貰つたアメリカの衣服をほどいてカバンを作つてもらいました。アメリカさんの衣服は大きいでしょう、色々なものに使用されました。それからパンツも作つてもらいました。あれは楽しかったです。そしてメリケン粉の袋で袖なしのランニングのようなものも作つてもらいました。

▼炭焼き生活

浦内で生れ浦内で育ったので

すが中学校になつて一年間、石垣中学校で学びました。親父はこれまで野田さん所で働いていましたが、その野田さん所もなくなりました。そこで石垣島に出ることになりました。そこで石垣島に出来ました。その前に野田さんの身内の人々が西表島に来ていて、炭焼きをやっていたのです。そうする中で炭焼きの責任者として来てくれたんか、と言われて親父はその仕事を頼まれて再び、西表島に戻りました。そうすると私も親父と一緒にやがおうでもついて行かなくてはなりません。親父が炭焼きをやり出したので、共に山に入りました。住んだ所は私が石垣島から帰って来た当時は宇多良で、それもずっと山の奥です。浦内川の支流である宇多良川沿いに旧宇多良炭鉱の貯水タンクがありますが、場所はそれからもっと中に入ります。

炭焼きは木によりますから、上質の木炭を焼くため、木を求めてあちこちに行きました。昭和四〇年ぐらいです。宇多良で木炭を焼いている人は当時で五軒ぐらいありました。場所はそれぞれ違います。宇多良には水田がありましたから、そこにはその他に米を作っている人がいました。炭焼きの場合、自宅は炭焼き窯の側に建てるというのが普通で、どうしても山に入らざるをえません。

炭焼きは一年間を通してずっと出来ます。当時は営林署にそういう山を払い下げてもらつて許可を得てから木炭つくり出荷します。その頃、五トン未満の船が浦内川を遡つて来ました。そして石垣島間を往復していました。そこで焼いた木炭は石垣島に出荷し、そこで販売するという具合です。木炭に用いる木は雑木で椎とか檉などです。その中で樺は木炭としては値段が高いですから、そういう木が密集している場所を見つけて窯を造り、炭焼きに入る訳です。これは遠くてもいいから、そこに窯を造つて木炭つくりに精を出します。

西表島では当時、働く場所がほとんどありません。当然、現金収入が必要になります。木炭を賣ることで現金を得ました。私の友人は高校に進みました。私はまず働くことが先決でした。山には娯楽はないが、それもラジオがないということで諦めがついたと思います。炭焼きは最初、窯の側に住居を建てたが、後は炭焼き小屋は山の中に置き住居は別にして川の側に設けました。場所は宇多良炭鉱跡の下の方です。宇多良での炭焼きは結婚する昭和四五年ぐらいまでやりました。私は山に最後まで残り、木炭を焼いた人です。結婚後、本土に行きました。

(採録編集・通事孝作)

いるものですから。西表島の炭焼きは戦後から始まつた訳ですが、当時にすると日当ぐらいは出たと思います。木炭は石垣島に運びましたが、その他に材木も積み出していました。当時は宮古あたりから直接に広運丸とかが沖泊まりして、材木を運んでいました。

収蔵図書紹介

受贈図書紹介

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。
あわせてお礼申し上げます。

寄贈者御芳名	受贈図書名							
沖縄開発庁	沖縄離島及び過疎地域における調査書	沖縄県企画調整部	八重山新広域市町村圏計画	史蹟名勝天然記念物				
全国離島振興協議会	沖縄県におけるイベント誘導施策推進調査	一橋大学社会部	沖縄の犯科帳					
具志川市	沖縄県町村会報第一集、第三集	農林水産省	農村の生活					
沖縄県町村会	沖縄県町村会報第二集、第三集	総務庁・統計局	ミニ統計ハンドブック					
具志護	沖縄地名考	山城善三	沖縄運輸総覽					
山城善三	なにくそやるぞ	琉球銀行	援護のあゆみ					
琉球案内	琉球千草之巻	琉球石油	沖縄相互銀行三十年史					
新沖縄案内	沖縄経済の足あと	琉球開発金融公社	琉球石油社史三五年のあゆみ					
琉球の土俗	琉球の土俗	琉球郵政事業所	琉球開発金融公社十年史					
沖縄戦報道記録	沖縄戦報道記録	沖縄郵政事業所	琉球郵政事業史					
経済統計要覧	沖縄の経済統計要覧	沖縄電力	沖縄電力一五年史					
沖縄の福祉統計	沖縄の福祉統計	簡易保険郵便年金加入者協会	簡易保険郵便年金事業史					
沖縄の模合	沖縄の模合	沖縄建設業協会	沖縄建設業会四十年史					
"	"	総理府・統計局	産業分類の解説					
沖縄県企画開発部	沖縄県企画開発部	県経済の構造	産業分類の索引					
沖縄県企画開発部	沖縄県企画開発部	沖縄の統計	島の概況					

第二次沖縄振興開発計画総点検報告書

那覇市企画部

那覇市の商業

那覇市の工業

北谷町史編集事務局

北谷町海岸・海域地名

沖縄県町村議会議長会

沖縄県町村自治名鑑

沖縄社会福祉協議会

沖縄の社会福祉二五年

山城善三

国民百科事典 ①~⑦

日本文化体系 ①~⑬

地方自治七周年記念誌

沖縄の電信電話事業史

日本政治百年史

田山花袋編・琉球名勝地誌

栗国村史

沖縄戦後選挙史三〇年のあゆみ

農林漁業中央金庫史一巻通史 三巻新聞集成

四巻法規通達

阿佐伊孫良 東京・八重山郷友会創立五十周年記念誌

八重山観光協会 創立二十周年記念誌 あゆみ

沖縄復帰十年のあゆみ

奄美・沖縄学文献資料目録

新城島

南島文献資料目録

伊江朝助先生を偲ぶ

沖縄経済発達史

苦惱する沖縄経済

沖縄商工名鑑

沖縄基本文献リスト

広報 ちやたん

浦添市史 第一巻通史編、第七巻資料編

宜野湾市史 第七巻資料編

國立中央図書館台湾

館藏琉球資料目録

分館 県外発行雑誌にみる沖縄関係記事目録

沖縄県立図書館 金武町と基地

中城村史 第四巻

日本民俗字体系

くばの葉

沖縄文化叢説

軍用地問題はこう訴えた

米国の沖縄管理の方向

沖縄童謡集

学徒従軍記

琉陽一~十二巻

女官御双紙 上、下巻

琉球国由来記

名 護 市	西 原 町	沖繩県立芸術大学 沖縄県工業連合会 浦添市教育委員会 沖縄県立図書館 別巻	琉球王国評定所文書 第一～五巻 琉球芸術大学の科学四号 沖縄産業史 琉球王國評定所文書 第一～五巻 琉球教育史論 沖縄現代史 みのかさ部隊戦記 沖縄の犯科帳 国学院雑誌 甘藷栽培法 沖縄戦記録写真集・日本最後の戦い 沖縄風土記全集・那覇の今昔 年中行事図説 沖縄県立芸術大学 沖縄県立図書館 西原町史 第二巻資料編(1)、第四巻資料編(3)	久志の民話 「教育史」関係新聞記事目録 南風原町教育委員会 那覇市立図書館 浦添市教育委員会 沖縄県教育委員会 浦添市立図書館 浦添市美術館紀要 船浦スラ所跡 上村遺跡 波照間小学校 沖縄開発庁 石垣市 西表小学校 宜野湾市教育委員会 宜野湾市史別冊写真集「ぎのわん」 具志川市 具志頭村 具志頭村史 具志頭村史第二巻通史編

購入図書紹介

多数の書籍を購入していますが紙面の都合上その一部を紹介します。

編集者名	図書名	発行所名	河野徳基地
本田安次 平良敬一 琉球新報社	南島文化叢書⑬沖縄の祭りと芸能 住宅建築別冊 南島 沖縄の建築文化	第一書房 建築資料研究所	清水正三 南島地域史研究会
後山吉室 藤下野 純健郎 郎栄雄 明編 県立図書館史料編集	琉球新報 琉球慰安婦 南島の古代文化	琉球企画	小野武夫 近世地方経済史料
五 沖縄県史料 前近代 図書館の製本 件名目録の実態 分類と目録	毎日新聞社 J C A 出版	琉球大学出版社	河野徳基地 公共図書館の管理 南島地域史研究会
ク ラ ブ 沖縄エッセイスト 文化課 沖縄県教育委員会	宮良泰平 目崎茂和 本山桂英 大浜祐健 三木英健 崎原久祐 伊波健伸	研究所 法政大学沖縄文化 沖縄県立沖縄図書館 所蔵郷土資料目録 中小企業経営論 沖縄県人物八重山編 日本民俗誌体系第一 八重山方言の素姓 南島の地形 巻	州立ハワイ大学 前花哲雄 八重山の歴史と民話 第一巻~五巻 写真集・望郷沖縄 第二巻~十巻
月桃 査報告書	日本民俗誌体系第一 八重山方言の素姓 南島の地形 巻	吉川弘文館 文獻出版社 吉川弘文館 文獻出版社	日本図書館協会 図書の知識 公共図書館の管理 南島地域史研究会 近世地方経済史料
ク ラ ブ 沖縄エッセイスト 緑林堂	沖縄出版社 角川書店 本邦書籍	ひるぎ 研究所 法政大学沖縄文化 沖縄出版社 ひるぎ 研究所 法政大学沖縄文化 沖縄出版社	日本図書館協会 文獻出版社 吉川弘文館 文獻出版社

業務日誌

十一月十七日

戦争体験聞き取り調査波照間へ職員一名出張、一八日まで。

十一月十九日

■一九九四年（平成六年）

十月十九日

第八回編集委員会開催。議題①第十一巻資料編新聞集成IIの編集（構成）方法について、②第十二巻資料編戦争体験記録編集方針など。

十月二十四日

太平洋戦争竹富町戦災実態調査票の再提出の協力依頼文書発送、石垣在町出身者へ一三〇件。

十一月一日

戦争体験記録原稿執筆依頼文書を九名の方に送付。

十一月四日

町史編集室定例会議。十一月業務予定検討。

十一月七日

竹富町史だより第六号、町内各区長へ全世帯への配付依頼及び関係機関へ送付。

十一月九日

戦災実態調査票回収に小浜島へ職員二名出張。十一日まで。

十一月一〇日

戦争体験証言者聞き取り調査のテープ起し作業開始。

十一月十五日

竹富町史第十一巻資料編新聞集成II入札、富川印刷が落札。

十一月二九日

戦災実態調査票回収のため西表（祖納・干立）へ出張（職員二名、十二月一日まで）。

十一月二九日

竹富町関係の民話をテープに収録し、保存している沖縄国際大学遠藤教授（宜野湾市在）を訪ね、民話資料使用交渉及び資料収集で那覇市、宜野湾市へ出張（職員一名三〇日まで）。

十一月一日

戦争体験証言者聞き取り調査のテープ起し作業継続。

十一月五日

昭和一九年（一九四五年）頃の町税務課保存の町内各集落地図約三〇枚をコピーする。

十一月六日

町史編集室定例会議、十一月業務予定検討。

十一月一六日

太平洋戦争戦災実態調査票（提出者のみ）から、沖縄県の「平和の礎」刻銘該当者調べで欠落している戦没者三八名の名簿を町民課へ資料として提出する。

十一月一三日

新聞集成IIの製本依頼印刷所より、印刷原稿入校（大正六年（大正九年）分の初校作業始める。

十一月一四日

戦災実態調査票回収のため西表（祖納・干立）へ出張（職員一名、一六日まで）。

十一月一四日

戦災実態調査票回収のため小浜へ出張（職員一名、一五日まで）。

十一月二二日

税務課関係廃棄分の行政資料、書類三五箱収集。

■一九九五年（平成七年）

一月四日

町史編集室内定例会議。一月業務予定検討。

一月四日

新聞集成IIの初校作業継続。

一月四日

戦争体験証言者聞き取り調査のテープ起し作業継続。

一月九日

戦争体験記録（戦災実態調査票による希望者）の証言者一七名の聞き取り調査を編集委員（本土・沖縄本島・石垣在）に依頼する。

一月一八日

任期満了に伴い町史編集委員一六名、全員再任により辞令書交付並びに第九回町史編集委員会開催。議題①町史編集委員長、副委員長選出で委員長に當山哲男氏、副委員長には西里

喜行氏を再任②第十一巻資料編新聞集成II編集構成案について③第十二巻資料編戦争体験記録の編集進捗状況について④第十巻資料編前近代・近代編集方法について⑤史跡巡検、竹富島の蔵元跡など九カ所を、編集委員、職員巡検する。

編集後記

▼『竹富町史だより』第七号が出来上がりました。今号は「戦争体験記録」発刊に向けて、これまでに寄せられた「戦争証言」と村落の様子等を明らかにする宇多良の「歴史の証言」を「両輪」にさらに「写真に見るわが町」「新聞で知る町の今昔」「文化財探訪」「聖地めぐり」のほか「波照間村番所の板文書」を取り上げました。板文書は近代の資料ですが、村番所には人頭税を知る古文書等もあります。

▼「聖地めぐり」は御嶽を中心としたものです。竹富町の場合、「琉球国由来記」には四十五カ所の御嶽が記載されています。しかし町には同記に掲載されていない御嶽も多くあります。その中で由来記にある御嶽でも廃村、神司の後継者不在で消滅したものもあります。今後、これらの御嶽も取り上げたいと思います。「島じまの語り部」では、生きしい証言が得られました。



竹富町史だより 第7号

平成7年3月31日 発行

編集発行 竹富町史編集室

沖縄県石垣市字大川10番地
☎ 09808-2-9985

印 刷 八 島 印 刷